

ネパール地震緊急救援事業の基礎保健緊急対応ユニット（BHC-ERU）派遣報告

大阪赤十字病院 臨床工学技術課係長 石原健志

私は、2015年6月2日から7月15日の約6週間、ネパールのシンデュルパルチョーク郡メラムチ村で、医療活動を展開していた日赤チーム第2班の技術要員として派遣されました。

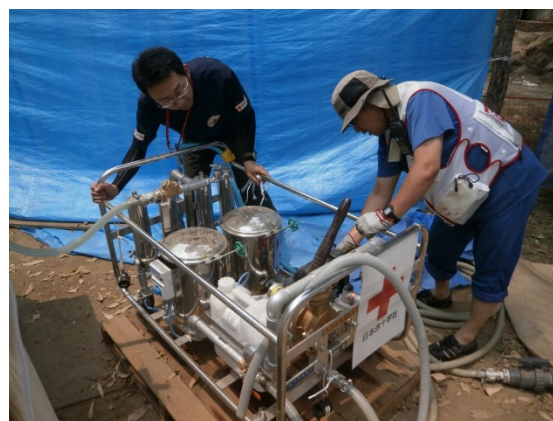
第1班で要員宿舎や浄水装置、発電機、シャワー、通信装置等がセットアップされており、私はその管理、運営を引き継ぎました。しかし、われわれが派遣された時期はモンスーンの直前で、早急の雨季対策が必要でした。要員宿舎に砂利を敷き詰めたり、要員宿舎テントやオフィステント周囲に溝を作成したり、日々その対策に追われました。また生活用水を確保するために、近くのメラムチ川に採水に行っていたのですが、モンスーンの時期になると川が氾濫し、危険な状態となりました。このため、新たな水源調査や、雨水をためて要員の生活用水の確保に努めました。

また、地元スタッフとの交流やチームビルディング、要員のストレス軽減のために、バトミントンコートやハンモックを作ったり、竹で作った本格的な流しソーメンパーティーを行ったりもしました。われわれの要員宿舎のすぐ近くには、家族を地震で亡くした孤児もたくさんいました。小さな余震でも子供たちが大声で叫びながら家から飛び出す姿を、時々目にしました。そんな子供たちが毎日のように遊びに来て、楽しそうにバトミントンをしているのがとても印象的でした。

われわれの活動も予定通りに進み、活動を第3班に引き継ぎ無事帰国することができました。



アメリカ赤十字の衛生通信機器 VSAT を日赤チームが使用できるように LAN ケーブルの調整をしているところ（一番左が私）。



川から採水した水を浄水装置で濾過しているところ（右側が私）。



ネパール人スタッフから現地の情報を収集しているところ（左から2番目が私）。



現地スタッフと家族を招いた親睦会で、私の作ったハンモックで遊んでいるところ（右から2番目が私）。



現地スタッフと家族を招いた親睦会で、流しラーメンを食べてもらっているところ。



心のケアのバドミントンコートで震災孤児が遊んでいるところ。



日赤チーム第2班の集合写真（後段、右から2番目が私）。